

世界・日本の運命の分かれ道——「寅は千里の藪に棲む」年は既に始まっている

森 一久

京都・清水寺の貫主が「寅年の」新年の象徴となる文字を、墨痕鮮やかに、「新」と書き示したとき、並み居る観衆は、やや度肝を抜かれたように見えた。波乱万丈の「現在」における、この「平凡」な文字の「意味深長さ」をどう感じたであろうか。冒頭の「千里の藪・・・」は三千年前の中国の古典「左傳」にあり、とにかく寅（虎）は考えられない位広く、深く変幻自在に、清算・変化・発展を求めて、暴れまわるとされている。いや、既に波乱の世紀は始まっている。

日本で歴史上最初の政権交代が起き、そのチェンジを求めた国民自身も途惑う（と言うより判定し難い）位の出来事が、発言が、思考様式が次々に、現れ、その幾つかは、すでに具体化し、百家争鳴の場となっている。

端的な例だが、丁度今、私の前のテレビでは、従来のNHK流の、日曜朝の典型的な官製番組が放映中。ここ何十年も、ほどよく穏当な発言してくれる「権威者」を並べた、退屈な政治討論会「日曜討論」が繰り返されてきた。それが俄かに、NHKも変身か、**駐留なき日米安保体制**という言葉が、行き交っている。不思議なことに、或る出席者などは、今までの正反對の発言は忘れたように、平気な顔で、討論にうまく調子を合わせて番組は目下進行中・・・——これだから**日本人の豹変は度し難し**、信用できないと思う海外の人も多いにちがいない。一昨日鳩山首相自身が記者会見で「戦後数十年外国軍の駐留が続いているのは異常、とかねて思っているが、私も総理で居る間はこの意見は封印しておくつもり」と公式に発言したりしている。

それもあってか、県知事会が、やはり沖縄だけに米軍基地の負担を押し付けているのは問題申し訳ないと、「普天間米軍基地の県外候補地の選定に一肌脱ごうか」という、従来無かった動きもでてきた。

以上の日本の例は、筆者などから見て、比較的まともに見える出来事をあげてみたものだが、無論このほかにも、支離滅裂、無原則に見える政策論や出来事も山ほど眼前で起きていて、とはいうまでも無いが・・・。

だから若し、仮に地球温暖化ガスや資源枯渇問題がないとしても、「脱石油」は避けて通れない道であると思う。

ばらばらの今後の世界像のままでは、「国際合意」など「百年河清を待つ」に等しい。

以下は主要な「切り口」の若干を掲げて、今後の分析の導入部としておきたい。少々新奇な問題提起もあるので、読者の方々からのご意見など頂ければ、幸いである。

①少なくとも当分の間、途上国・新興国の経済発展に百年来の世界経済危機からの脱出が賭けて居るとすれば・・

百年来の世界経済危機の対策は、各国の膨大な借金の積み上げ、供給過剰、需要不足・デフレ・スパイラルかの恐れの中で、産業経営者や団体の多くは、「おねだり」以上の政策提言をする気力も不足、わが社だけの生き残りを模索するのみに見える。世界経済の持続的発展ないし将来の「存在」の姿を描けないで居る。今見えているのは、新興国の需要への期待のみ。こんな時、途上国・新興国に炭酸ガス削減を無理に納得して貰い、先進国からの技術・経済支援で、途上国・新興国から今後の需要や安い人件費をあてにして、「百年来の危機の清算」が出来ると考えているのであろうか。

②先進国の産業の将来展望は

先進国の中で日本だけは少々違うようだが、欧米の経営者たちの将来展望には、意外に楽観的なものが、垣間見られる。象徴的な現象は、百年危機のときの公的資金の返済を急速に実行している。(企業への政府の干渉を嫌う企業家魂には、敬意を払うべきあろうが)。

しかし問題は彼らの将来の発展像の中心に、やはり、サブプライム問題を引起したと同じ手法の「金融工学イノベーション」に再び重点を戻しつつあるような兆候がある。

③技術開発を中心とする世界経済の再建の可能性と限界

日本はとくにきめのコマカイ技術で、自動車や鉄鋼などで世界の牽引力となって過去経済の発展に大きな寄与をつづけてきた。今後も環境、資源問題でもその役割はある程度期待できるだろう。

しかしながら、その本質から避けがたい限界を忘れてはならない。それは**技術革新は**